

「雁」

「雁」とは題しても、鷗外の名作とは、なんのかかはりもない。やばなわたくしに書けるのは、「雁」をあらはす日本語についてのはなしがせいぜいのところであらう。ただ、はるかにあひへだたる故国の恩師、倉野憲司先生のもとへ、つたないたよりに代へて、なにがなしたためようとするわたくしとしては、おなじことならと、をりから、そぞろ旅愁もおさへがたいままに、蘇武の故事もおもひおこされ、いささか信書にゆかりある題目をえらんだまでである。

外国人の、日本にとりのすくないことに、おどろいてゐるのとが、そんなものかと、このごろになつて、日本人をおどろかしてゐるらしいことを、わたくしは、ここへきてからききつたへた。一方、わたくしはわたくしで、日本人のたちばから、きて早々に、イギリスにはとりのおほいのに、目をみはり、ときには、耳をもたのしませてゐた。だから、外国人のおどろきをききしるにおよんで、まことに、さもあらんとおもつた。しかし、日本には——すずめとからすとは別だが——総じていへ

龜井孝

ば、とりのかすがすくないのであつて、種類にとほしいのではない。その証拠に、いろいろと、とりの名をならべるだけのことなら、だれにもできる、ひわとか、もずとか、むくどりとか、こまどりとか、ほほじろとか、ひばりとか、みそざいとか。このやうな、本来の日本語をもつてよばれるとりを、わたくしたちは、まだまだ、このほかにも知つてゐる。そして、おほくのとり、の名が、本来の日本語であつて、よそのことばでないといふことは、それらのとり、たちが、おほむかしから日本の島にすんでゐたか、または、何千年も、つばめのやうに、いつも夏になればわたつてきて、いづれも、日本人の生活に、ながいながいなじみをもつてきたからにほかならない。

人間は、興味をひかれるところから、はじめて、ものに、それを、ほかから区別するための名をつける。興味には、いろいろある。めづらしいために、ひとの興味をひくものも、よのなかには、すくなくない。しかし、ものが、平凡なふつうのひとびとの目にとまるためには、ものそのものが、どこにでも、み

あたるのでなければならぬ。そして、もし、これをとり、のばあひにあてはめていへば、むかしは、かれらのかずが、こんにちより、ずつと、おほかつたにちがひない。それが、いろいろな事情で、ながいあひだに、しだいに、へつていつたのである。日本人の生活自体においても、時代のうつりゆくにつれて、とりたちとの、したしみが、うすれていつたのである。直接にこゝろすことをしないで、農事国の日本としては、元来、とりたちのあそんでゐた自然そのものの世界をせばめていつたことが、おほきく、ひびいてゐることであらう。

すこし、はなしがよこみちへそれるが、ある夏、わたくしは、イングランドの北の方をひとり旅行した。あるいてゐると、ゆけども、ゆけども牧場である。そこでは、人間のあるく一条の道だけが、人間の領域であつて、あとは、自然そのものとして、のこされてゐるのである。そこへ動物がかこつて、あそばせてあるのである。牧場とは、いはば、陸のうへのいけすである。みちの方は、いけすといけすとのあひだを、ふねがかよへるやうになつてゐるとおもへば、いいのである。かういふ、自然と人間との関係は、やがて、自然に対する人間の感じかたを、おほきく左右してゐることが、いろ／＼の例でわかる。日本人は、つちに対して、ふかいしたしみをいだいてゐる。イギリスのひと／＼が、はなつくりのすきなことには、これまた感心させられたが、かれらは、つちへのしたしみでは、なをつくるのではない。花壇を額ぶちとして、人間の領域を自然から、きりとるのである。いきものに対する愛のふかいのは、

ことに、おどろくばかりである。これにも、背後に、ながい生活の歴史があつて、おのづと、さうなつてゐることは、ここにとくまでもない。その愛は、いへのなかに飼つてゐるいぬやねこから、自然の一部である野鳥におよぶのである。しかし、かれらの野鳥への愛は、日本人が、いはゆる花鳥風月といふ優美な趣味から、とりをたのしむのと、かならずしも、おなじではない。日本のやうな、くには、人間がただちに自然のなかにとけこみ、いはば、人間も自然のわくのなかで生きてゐる。しかし、人間の自然に対するたちがたいつなかりは、一方、自然が人間の生活の一部であることの身ぢ、かさでもある。ここでは、さういふかたちで、自然と人間とが調和してゐる。しかるに、自然と人工とをいつも、対立させて感じてゐるところでは、自然の世界も、一定のわくできりとつてながめられる。いひかへるなら、日本人は、自然のなかにひたつて、全体としての自然をたのしむといふ傾向をとるであらうところを、西欧人は、それ自体は、美でも醜でもない、ただ、あるがままのものとしての自然から、なにかを、人間のものとしてとりだして、これをたのしむ傾向をとるといふ風に考へられる。野鳥への愛にも、さういふものをわたくしは感ずる。たとへば、新聞に、ものずきなひと／＼が、各地から、それぞれにいろ／＼の観察をよせてゐるのを目にするとき、たしかに、そこには、いきものものついのちへのふかい愛があふれてゐるが、また、それだけに、さういふ人間的関心をつよくおしだしてゐるのを、わたくしがみると、それは、しづかな詩情のうちに、自然の一部として

のとり、のこゑなり、すがたなりを、たのしみたい日本人のさ、にとつては、ほとほとにわづらはしいばかりである。しかし、そのやうなさが、——それが、日本人のあいだで、ながい伝統となつてうけつたへられてきたことは、うたがへない——からは、たとへ、野鳥がへつてゆくのををしむころはうまれても、それをふせがうとするがごとき精神は、なかく、うまれがたい。さうかんがへてくれば、やはり、もし、いまとむかしとをくらべることができたなら、きつと、むかしは、日本にも、ずつと、とりがおほかつたであらうことは、うたがひない。すべてのばあひを説明できる例ではないが、自分のみぢかな経験だけでも、東京近郊のやぶうぐいすは、十年もまへにくらべて、すでに、めつきりとすくなくなり、庭の木立に、かつては、よなよな、ないてゐたふくらふがいつか、そのすがたをかくし、ひばりのまひあがつたくさはらのみどりは、としをおうて、きえていつてしまった。そして、いまでは、すでに、それをむかしばなしとして、たま／＼くちにのぼせるにすぎないものである。ただ、すずめのやうに、あまり、人をぢしなないとりだけが、さとちかいところにすみなれてゐるばかりなのである。

「雁」は、わたりどりである。だから、もともとすずめやからずのやうに、あさゆふ、これになじめるわけのものではなく、季節だけのとりである。しかし、むかしの日本人のあひだでは、詩情のそそられるとりのひとつとして、うけとられてきた。また、食膳にのぼせられたことは、「雁もどき」といふ卑近な名からもうかがはれる。しかし、いまでは、「がんもど

き」の意味も、なにが雁にもどくのか、わすれられてしまつてゐようし、みぢかに、雁のすがたをみることは、まれである。つまり、われわれがよく知つてゐるのは、とりそのものではなくて、がんといふ名ばかりなのである。この点では、所詮、おほくのとりの名と、共通する。

「雁」は、むかしから、がん、とよばれたのではなく、本来の日本語では、かりである。かりといふかたちの方は、いまではくちにするにはすくないけれども、ふるい伝統が、ある点では、ながく生きてゐる日本において、ふつうのおとななら、かりといふ名も、やはり知つてゐるであらう。「かり」の方は、すでに古事記のうたにみえ、また万葉集のうたや古今集のうたになれば、いくつもあらはれる。がんの方は、よほど、それにくらべれば、あたらしいことだけはたしかであるが、漢字の「雁」でなく、ことばとしてのがんが、かりにとつてかはつて日常にもちゐられるやうになつた年代について、これをはつきりときめうるきめてはない。狂言の「雁あらそひ」（続狂言記二ノ三）では、がんが、もつばら、もちゐられてゐるから、おそくとも、室町時代には、俗語にすでに、がんがもちゐられてゐたものか。がんもどきの方は、元祿ごろまでくだつた例しか知らない。

わたくしが、ここで、問題にするのは、なぜ、かりががんにかはつたかについてである。すずめには、ふるくは、すずみといつたかたちもあり、つばめには、つばくら、つばくろのかたちだが、こんにちも、ならびおこなはれる。とりではないが、蝸牛のばあひには、わたくし自身、でんでんむしと、かたつむり

と、まいまいつぶろ、この三つともに、單に、きいてわかることばでなく、自分で、つかふことばに属する。(まいまいつぶろといふと、螺旋状のからをおもひうかべ、したがつて、このことばは、つのをふつてあるいてゐるときのかたつむりにはふさはないといふ微妙な感じの差はあるが、でんでんむしとかたつむりとは、こどものときにおぼえたくちずさみのせるであらう、あへて区別せずに、もちゐる)。また、おなじものを、ほとんど区別なく、二つの名でよぶいい例には、がまがへるとひきがへるがある。だから、「雁」が、かりからがんになつたり、また、ときにはかりともがんともよばれることもあるにしても、それらのことだけなら、他に、例はあるわけである。しかし、つばくらめが、つばくらとなつたり、つばめとなつたりしたのとちがつて、がんのばあひには、漢字雁の字音が、かりにとつてかはつたかたちになつてゐる。それでは、一体、字音にもとづく、土着のとりの名はあるかといふに、ある。郭公、せきれい(鶺鴒)、それにばん(鵲)。だから、がんが雁の字音であつても、これまた、さしたる故障はない。しかし、郭公(字音かなづかひは、クワクユウ)は、ふるく、かくこふとして、あらはれるところをもつてあきらかなごとく、このかたちが本来の日本語であつて、音のによりから、漢語の郭公をもつて書かれるやうになつたものである。ふるく、文献にがまを蝦蟇と書きならはしてゐるのも、じつは、おなじく、音のによりで、がまは、蝦蟇の字音からでたものではない。(がまは、じつは、仏語、降魔——がま——にもとづくものとかんがへられるのであるけれども、ここには、ふれない)。

一般的にいへば、とりの名、むしの名、くさや木の名などの、漢語が日本の土地にひろまるまへからおこなはれてゐたものを、あへて、漢語でおきかへるには、なにかそれぞれに、個別的な特別の理由があるものとおもはれる。ただ、さういふ理由は、あとからつねにはつきりと、わかるわけでないだけのことはある。つばめはえんに、つるはかく(字音クワク)にならなかつたのに、なぜ、かりはがんになつたか、といへば、奇矯なとひとしてひびくではあらうが、がんのばあひ、はたして、これが單純に字音に出でることばかどうか、わたくしは、うたがつてゐるのである。そこまでいへば、あと、くだくしく、とくまでもないかもしれない。つまり、わたくしのかんがへでは、かりといふかたちそのものが、がんの前身で、漢字の雁の方は、郭公や蝦蟇のたぐひではないかといふのである。さういつて、いひすぎなら、字音のがんが、かりにとつてかはることのできたのは、がんといふかたちが、かりによく似てゐたため、したちとして、いはゆる *Attraction Paronymique*——いひかへれば、いはゆる民間語源の意識からの、ちかよせ——が、二つのあひだに、おこつたためではないか。

日本語のなかには、いちじるしく漢語がながれこんでゐる。しかし、それは、文化のうはずみのことで、生活のなかにふかくしみこんで、すこしのみづくさい感じもない漢語——いひかへれば、漢語として意識されないまでに、日本人の自然の感情のなかにとけこんでしまつたところの、字音起源のことば——といふものが、漢語全体のなかで占めるわりあひは、むしろ、

きはめてわづかである。漢語は、とぎまといふかたちでは、まがふかたなく日本語であるが、おのづから譜代とのあひだには、全体としてのけじめがある。けれども、ひとつひとつの例をとれば、たけはくさか木かといった、けじめのさだかでないものが、かならずでてくる。かりに、がんのかたちは、もつばら雁の字音にもとづくもので、かりとは、直接になにかかりもないとしても、がんに、これが漢語であるといふ意識のよいわいことは、あらそひえまい。そして、はなしをここまでもつてくれば、つばめはえんにならなかつたのに、かりががんになつたのは、やはり、心理的には、がんが、かりとかかりあひをもつたからであらうといふことも、同時に、いひえまいか。これを確実に証明することは、こんにちからは、もとより、不可能であるが、日常の言語心理が、さう、やすく／＼と、かりをすててがんをえらんだらうとも、おもへないのである。

ついでながら、植物のなかには、くすりとしてもちゐるところから、漢名の方がひろまつたものもある。英語の、beef, pork が、もともとは、フランス語の、boeuf, porc から出て肉をあらはす語におちついたことは、有名であるが、日本語のぎゅうやとんは、はじめから、肉をのみあらはすために、俗語としてもちゐられたもので、起源的には、むしろ、うしとかぶたとかいふのをさけた隠語的なものであらう。さういふいろいろなことはあるが、がんがそのむかし、こんにちのぎゅうやとんに対応するものであつたとは、どうも、かんがへにくいとお

もふ。これは、念のため、一言するのである。

最後に、かりそのものが、ずつとむかしにおいて、雁の字音から派生したものでないか、どうか。両者のあひだの關係をつけることは、音韻のうへからは、可能である。しかし、これは、せいぜい、可能だといふだけのはなしである。わたくしは、かりをがんから、とくのにくらべれば、がんを、かりのかたちなくしては、うけいれられなかつたらうと推定することの方が、すくなくとも、はるかに可能であるとおもふ。かりと雁の字音が、んによりは、もとより偶合であるが、ことばの歴史をとくかぎは、このやうな偶然にひそんでゐることも、まあ、あるのである。もつとも、どのみち、ながながと述べた結果は、A wild-goose chase のそしりをも、まぬかれまいか。しからば、貴重な紙面をふさいだことを、ひとへに、おわびまうしあげたい。(英國・ケンブリッジにて)

——一橋大学教授・ケンブリッジ大学講師——